

三好夏凜がいつも通りに模擬戦による鍛錬を行う傍らで、犬吠埼樹は自分の手に握った長いワイヤーで砂地を叩く。

怪我をする可能性があるから。少し前に通りがかった人に注意されたか凜たちは、勇者装束に切り替えこそしたが、武器は木刀など、比較的軽度で済む武器に持ち帰ることにした。というのも、ありがた迷惑というもので、ちよくちよく様子を見に来るようになってしまったため、やむなく場所を変更することになったからだ。

厄介なことになる前に、武器は普通に持ち替えておこう。ということだ

「感触が少し違う……」

樹の本来使うワイヤー状の武器は、手の付け根辺りに現れた専用の部分から伸びていくのが基本だ。そのため、手に持って振るう。というのは、様々な部分で齟齬が生じてくるしかし、樹の武器は勢い良く振るえばピアノ線のように斬り裂くこともできてしまうため、使うわけには行かないのだ

「交代！」

教導官のそんな声が聞こえ、顔を上げる。さっきまで激しい戦いを繰り広げていた――戦一方だが――夏凜は砂浜に倒れこんで、乱れた呼吸を整えようとしていた

「夏凜さん、大丈夫ですか？」

「ん……平気。ってか、木刀の分教導官全力過ぎ」

それが嫌なわけではない。寧ろ、力加減の無い本気で相手にしてくれること自体嬉しいことなのだが、それとこれとは、話が違うらしく。ぼやいた夏凜を見下ろす教導官、久遠晴海の悪魔のような笑みに「冗談です」と、そそくさと逃げていく

「樹ちゃん、私が前に教えたことは大分できて来てるから。その調子で」

「はいっ」

「まずはそれを考えるんじゃなく、自動的に。反射的に行えるように」

「頑張ります」

元氣な返事だと樹は自分自身に思っ、息をつく。気が抜けている気がした。そんな調子では、何も手には出来ないし、ましてや鍛錬さえさせて貰う事はできない

「お願いします」

強くなりたいたいの、弱い自分は嫌だからというのものもあるが、姉である風や、勇者部共通の恋人である天乃のことを失いたくないからだ。

周りみんなの力は自分よりも上だと自覚している。頼りになるとだっと思ってている。しかし、そのことと、頼り切って良いことはイコールではないのだ

「ええ、よろしく」

だから、久遠晴海^{ほげもの}を相手に、引きそうな腰を戻して身構える。今はやられても良い。どれだけ倒れこんだって良い。必要なときに立っていられるのなら、誰かの隣にいられるの

なら、力になれるのなら。守られるだけでなく、守ることができるのなら

樹はそう、心に強く思っただけでなく、ワイヤーを一振りする。限りなく軽く殺傷性を極力下げたそのワイヤーは風を斬って砂を打ち、地面を抉る

「っ！」

左手に持つワイヤーを横薙ぎに振るい、晴海が軽く地面を蹴って距離を置くと、樹は勢い良く駆け出してその後を追う。その瞬間、晴海は踵で砂浜を踏みしめると、流れるようにつま先へと体重を移動させて、蹴り出す

「！」

目の前で砂が舞う。天乃に似た桃色の髪が風に靡いて、樹の視界の中央から下部へと推移していく。

危険だと思った、躲さなければと思った。ならどうすれば良いのか——しかし、晴海の行動はその答えを導き出すよりも早く動き、左手で樹の右手首を掴むと勢い良く引き、右手に持った木刀を首筋に宛がう。僅かにぶつかった鈍痛がじわじわと流れ込んでくる中、樹は思わず止めてしまった息を吐いて、吸う

「もうちよつと考えて、樹ちゃん」

「す、すみません」

樹は考えてなかったわけじゃない。しかし、晴海からしてみれば、考え足らずだったのだ。また一定距離離れていく晴海の背中を見つめながら、樹は叩かれた首筋に手を宛がって、唇を引き締める

(何も出来なかった。何一つ、出来なかった……)

夏凜と話していると、いつも自分も何も出来ていないと言うが、その比ではないと樹は悔しさを噛み締める。まともに戦うことすらできていない。一分さえも持たない

「樹ちゃん？」

「あ、その……すみません」

少しづつ変わっていていると思う一方で、それはただの自己評価に過ぎないのではないか。という不安が募る。晴海の戦い方はワンパターンではない。今のように一瞬で圧倒されることもあれば、なんとか戦えることもある。だが、それでは、バーテックスの戦いの時にそんな五分五分では、いけないのだ

「少し、手本を見せてあげよう」

「え？」

「すみませーん、白鳥歌野。飛び入り参加を所望しまーす！」

自分と似た色合いの装束に身を包み、今自分が手にしているものと似た武器を手にする少女、白鳥歌野は明るい声で、晴海へと願い出る

歌野は天乃の精霊ではあるが、若葉と同じく先代の勇者の一人だ

「この前来た、乃木さんと同じく先代勇者です」

「白鳥さんも……そう」

晴海はあのと時のように、勇者という言葉を聞くとや否や、木刀という仮初の玩具を投げ捨てて、腰元に差した刀の柄を小突く

「なら、本気の本気ね」

「望むところ！」

嬉しそうに言う晴海の表情は、喜びに満ちてはいるが、どこか狂喜染みたまものがあると樹は思っている。そんな驚いているようにも見える樹へと、歌野は振り返って、笑みを見せた

「少し見てて」

「あの、白鳥さ……」

「久遠さんがやりたいことを、代わりに私がやるだけだから。感謝は久遠さんにね」

優しい笑みだった。頼りになる背中だった。樹は歌野の見せる背中を見つめ、

その奥に見える強敵の姿を見据える。勝てるのだろうか、何かが出来るのだろうか

複雑なことを考えてしまいそうな頭を振り、見せてもらえる姿を覚えるために空白を作る

「ステンバーイ」

歌野は小さく長く息をついて、ゆっくりと体を前傾姿勢に倒していく。

少しずつ体が見えてくる晴海は身動きせず、黙って歌野を見て――

「ゴーツ！」

瞬間、風が舞った。蹴り飛ばされた砂粒がばちばちと樹の体を打つ。

歌野のいた砂場はスコップで抉ったかのように抉り取られていて、凄まじく激しい風を切り裂く音が乱雑に響く

「っ！」

「せあっ！」

歌野の鞭はまるでそれ自体が生物であるかのように、縦横無尽にうねり、晴海の体へと傷をつけていく。左から右へと振った瞬間には右へと振り替えし、今度は左斜め上からの振り下ろし

動いているのは足と手首のみだった。腕全体で振るうのではなく、藤蔓と呼ばれる武器を持つ右手、その手首から先のみで舞い踊っている。晴海が右に逃げれば右に、左に逃げれば左に、後ろに下がれば距離を詰め、下方向から振り上げる

「……速い」

率直な感想を晴海は呟く。撓る鞭は刀で防御しようと接触面でさらに撓って曲がり、防御の内側を引っ叩こうと伸びてくる。ゆえに、一定の距離を取っておかなければいけないのだが、歌野が的確に後を追ってくるために、距離が一向に開かない

「っ！」

そしてなにより、鞭の使い方が上手いのだ。先代勇者として使い続けていたからか、腕全体ではなく手首のみで振るう。その柔軟な間接ゆえに、鞭はより変幻自在に乱れ舞う

「まったく……ッ！」

「！」

悪態をつきながら、満面の笑みを浮かべる晴海は、腰から鞘を引き抜くと、一刀流から二刀流へと切り替わる。それで何が変わるのか。そんな風に嘲笑するような人物は、この場にはいなかった。

いや、仮にいたとしても、その開いた口は閉じることになるしあるいは、開いた口は塞がらなかったかもしれない。

「なっ」

晴海が鞘を手に取った瞬間から、歌野はただ手数を増やしただけではないと、感じた鞘を使い始めた途端、歌野の藤蔓は晴海に掠ることさえなくなったからだ。刀で中心を打ち、撓って曲がった先端を鞘で打ち払って弾く

後退するだけだった晴海の足が止まり、歌野が「見てるだけじゃ……」と、ぼやく

「の——つとおっ！？」

藤蔓を振るった瞬間、歌野はあえて踏み外して前のめりに体を倒す。頭上を刀が通り過ぎて——歌野はしゃがんだまま後ろへと飛び下がっていく

詰めた距離が開いていく。歌野の鞭さえ届かなくなった距離、二人は立ち止まって互いを見つめあう

「あつぶないあぶない……キャンノットフライね」

「取替えが必要になったのは久しぶりだわ」

首元に手を当てながら焦ったように言う歌野は笑顔で。ボロボロになったスポーツウェアを撫でる晴海もまた、嬉しそうに笑う。互いに、相手が手強いこと。それが嬉しかった。戦闘狂と呼ばれるそれとは違うが、しかし、自身の力をまだ高める余地がある。その相手となれる存在がいる。それが純粹に嬉しかったのだろう

「……先代、若葉も調子が戻ればもつとずつと」

羨望にも似た目で歌野を見て、その奥に若葉を見る夏凜の羨望する瞳と声。樹は自分もきつとそんな目で見ているのだろう。と思った

（なりたい……歌野さんみたいに、なりたい）

歌野は精霊だから、人間状態よりは強化されている可能性もあるだろう。だが、そんな強化がないとしても、自分にとっては憧れるべき存在だと、目指すべき頂の一つだと樹は思い、拳を握り締める

自分の武器の代用品であるワイヤーの感触を感じた

そして——

「せえあつー！」

気合の籠った雄たけびと共に、歌野と晴海がまた。肉薄する

「しっ!」

「!」

晴海は肉薄するや否や、向かってきた歌野の藤蔓を切り払い、その流れのまま歌野の藤蔓がけて刀を突き立て、左手に握った鞘を横薙ぎに振るう

しかし、歌野は二段階に弾き飛ばされた藤蔓を強く握り、手首をぐるりと回して、下段から振りあげて衝突させると、一瞬、クイツつと引き戻して波打たせもう一度振り上げる――が、ガガツつというような衝撃に弾かれ藤蔓は舞い戻っていく

「怖い怖い……っ、つと」

悠長に呟いているように見える歌野の頬には冷や汗が伝い、手首は休むことなく動き続けて、藤蔓が防壁のように残像を残して舞い踊る。それでも、目の前の教導官は一步も引かない。刀を鞘に納め、ゆっくりと前傾姿勢へと移行すると、まもなく一直線に突撃
藤蔓が触れるか否か、ほんの境目の部分に接した瞬間、薄く研ぎ澄まされたような金属音が響き、バチリと何かが弾ける

「……敵しいわ」

「同じく」

互いに肩で息をしつつ額から伝う汗を拭った二人は、今度こそ臨戦態勢の警戒を解いて、
一礼

「ありがとうございます」

「ありがとうございます」

晴海も歌野も満足げに笑みを浮かべて互いの手を取り、「またお願いします」と次の約束をする。それは、対等だった。先代勇者だと、そう名乗るだけの実力があつた。鍛錬を積んできたとはいえ、先代と比べれば未熟なのだと、夏凜は自分の力を否定せずに受け入れて、悔しさで包んだ絶望を握りつぶす。まだ遙か高みにいるのなら、登れば良いだけだ

「……夏凜さん」

「ん?」

互いを称えあう二人の高みを前に、樹は夏凜へと言葉のみを投げかける

「強く、なりたいです」

「私もよ」

「……もつと、もつと強く」

樹はそう良いながら、夏凜へと意志の宿った瞳を向けて。夏凜はその視線を一瞥して自分達がまずは目指すべき者達へと羨望の眼差しを向ける。どれだけ頑張れば良いのかは解らないが、少なくとも頑張らなければちつとも届くことはないだろう

「そうね、もつと強くならなくちゃ」

精霊が隣いるのは当然だ。だが、その精霊を差し置いて隣にいられるような……そんな頼ることのできる自分になりたいから。と、夏凜は言葉に擦ることなく、胸のうちに思いを綴った